

台風23号禍

被災地の記録

▷1◁

先月二十日、台風23号が府北部を襲った。戦後二番目と言われる記録的な豪雨は河川をほんらんさせ、各地でけ崩れを引き起こした。十五人の命と日々の穏やかな暮らしが奪われた。一九五三（昭和二十八）年の台風13号以来の大災害がなせ今、起きたのか。被災地からつづきに検証する。

「昭和二十八年の水害を越えるのでは」。台風23号の接近でみるみる上昇す

28年水害と台風23号の被害

	28年水害 (昭和28年)	台風23号 (平成16年)
死者(人)	36	15
家屋全壊(棟)	1168	26
家屋浸水(棟)	7765	7218
道路欠損(カ所)	3532	250

記録的豪雨

る水位に、由良川を管轄する国土交通省福知山河川国道事務所の諸留幸弘副所長（河川担当）は、緊張感を高めながら早く台風が過ぎ去ることを願った。前日から降り続いた雨は二十日昼過ぎから激しくなった。由良川をはじめ河川の水位は急激に上昇した。川から水があふれ出した。浸水被害が始め、各地でけ崩れが起きた。宮津市や舞鶴市では、裏

28年水害の恐怖再び



台風23号の影響で、ほんらんした由良川。住民の命や穏やかな生活を奪った（10月21日午前、舞鶴市内）

山から流れ落ちた土砂が家を巻き込み、住民が下敷きとなった。京丹後市などでも行方不明者が相次ぎ、濁流は人や車を飲み込んだ。関係者に緊張が走る。

「バスに水が入り、肩までつかっている」。午後九時すぎ、舞鶴市の消防本部に由良川沿いでバスが立ち往生しているとの一報が入った。この日の舞鶴市内の雨量は二七・七ミリと観測史上最高を記録、流域の平均雨量も二七・九ミリに。死者三十六人を出し、上流で総雨量五〇〇ミリに達した昭和二十八

年の台風水害に次ぐ記録的豪雨となった。諸留副所長は「広範囲にわたって強い雨が一齐に降った。二十八年水害と比べても水位が急激に上がっている。今までにない降り方だ」と振り返る。八日現在、府災害対策本部がまとめた被害は死者十五人、家屋全壊百六十一棟、床上浸水約三千棟、床下浸水約四千百棟。がけ崩れは約四百四十カ所で起き、いまだ宮津市では十五世帯に避難指示が出たまま。住民がもとの生活に戻るには、まだ時間がかかる。（北部総局 寺内勲）

▷24◁

京都新聞 2004年11月9日(火)掲載

新聞記事紹介

十月二十日午後八時半ごろ、由良川近くにある大江町役場庁舎への浸水が始まった。閉じられた庁舎のドアの下から泥水が入ってきた。役場駐車場に水がつくことはあっても、庁舎まで浸水することはなかった。異常事態だ。

大江町役場が浸水

非常用電源が水につかり、以後、放送は不可能になった。停電。電話不通。職員は携帯電話と消防無線で外部との連絡をとった。暗闇の中、ろうそくの明かりを頼りに階段の段数で水位上昇を観測した。懐中電灯を手に、足で水面下の様子を探りながら、重要書類やパソコンを二階に運んだ。



泥水につかった大江町役場（10月20日午後11時ごろ）＝同町提供

水害想定、大きく超え

き始めた早朝まで、庁舎内に閉じこめられた。現庁舎は一九八七年、由良川に近い北近畿タンゴ鉄道大江駅前建てられた。十二日には町民課と会計部署が庁舎二階で窓口業務を再開したものの、元の場所

で普段の業務に戻るには一カ月以上がかかった。（北部総局 梶井進）

台風23号禍

被災地の記録

▷26◁

沿道に雪が残る綾部市寺町の国道173号では、現在も仮設の橋による片側交互通行が続いている。橋の下にある元の道路は約三カ月たっても崩れ落ちたまま、復旧の明確な見通しは立っていない。台風23号が府北部に接近した昨年十月二十日、国道27号の陥没や土砂崩れ、府道福知山綾部線の冠水など近隣市町へ向かうすべての道路を閉ざされた綾部市は「陸の孤島」になった。

寸断された道路

情報がなく不安募る

知山市から綾部市へ向かっていた。途中、府立中丹養護学校付近で道路が冠水していたが、前の車に続いて通過し、綾部市小貝町に入ったところで地元の消防団に通行不能を知らされた。すぐに引き返そうとしたが、先ほど冠水していた地点もすでに通行止め。「とにかく高い場所へ」との消防団の指示に従い綾部市私市町の私市山古墳付近に避難した。通行中に身動きがとれなくなった車は若山さん夫妻のものを含め六、七台あったが、「避難所へめ情報がなく不安だった」と話す。翌朝の五時になつてようやく、福知山市報恩寺の公民館に避難。「館内にはほかに帰宅できず避難していた綾部市や舞鶴市の人らがたくさんいた」と振り返る。



道路が崩落したままの国道173号。復旧の見通しはまだ立たない(綾部市寺町)

昨年十月二十一日夕方のJR西舞鶴駅。台風23号による雨はやんでいたものの、動かない電車で駅に集まった人々には、いろいろな表情がにじんでいた。「あきません、陸の孤島ですわ」。駅員に詰め寄る人を横目に、ビジネスマンらしい男性が携帯電話を片手に、あきらめの表情を浮かべた。

動かぬ鉄道網

土砂3000トン 鉄路ふさぐ

中でも最も規模が大きかったのは、夜久野町末の山陰線下夜久野―上夜久野間で起こった線路上への土砂流入だった。「抑止(列車の運転見合わせ)がかかっていたにもかかわらず」が、かかっていたにもかかわらず、たまたまなっていたか。復旧作業に出た福知山保線区の井上浩一區長は、山がそのまま線路に落ちてきたような現場を見て、目を疑った。しかも現場は一方を山、反対側を川に挟まれて狭く、一目で作業の長期化が予想できた。



復旧作業に取り組むJR社員ら(10月27日・夜久野町末)

さらに崩落する危険もある中、慎重に大型ショベルカーを高さ約三十分の斜面にまで上らせ、崩れそう

な土砂を削り落とし、運び出す作業が昼夜兼行で十日間近く続いた。当初、五百トンと試算した土砂は、作業中に新たな亀裂が見つかり、掘削を続けると千トン、二千トンと増加。最終的には、約三千トンの土砂を運び出す大工事となった。実家が水害にあった社員もいたが、「(現場が)気になって仕方がなかった」(本田信一・同保線区総括助役)。鉄鋼製のくいを打ち込むなどして、三十日の始発に間に合わせた。同支社では、災害の教訓を冊子にまとめる取り組みを進めている。井上保線区長は復旧作業を通じ、「一分一秒でも早く復旧させたい気持ちを抑えて、支社の方針として安全を優先したことがお客さまと社員の命を守った」と振り返った。

(北部総局 高橋道長)

台風23号禍

被災地の記録

▷31◁

台風23号が直撃した昨年十月二十日夜、舞鶴市内の国道175号は、横を流れる由良川の急激な増水にのみ込まれた。家路を急ぐ多くの車が水没して立ち往生。暗闇と押し寄せる濁流のなか恐怖の一夜を過ごした。

兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部の一行と運転手計三十七人を乗せた観光バスもその一。福井県への一泊二日の温泉旅行から戻る途中だった。

異変が起きたのは大川橋を渡り、同市志高に着いた午後八時ころ。冠水で停車間もなく水が座席まで迫った。屋根に上るしかない。

国道水没

⑤

乗客らは先を見越し、小さな折り畳み式のはきみ三丁で急いでカーテンを切り裂き、それをつないでロープを完成させた。

脱出が始まった。座席の窓から出て、車内にあったハンマーで上部の窓を割り、その枠に足をかける。上から引き上げ、下からは尻を押して全員が屋根によじ登った。屋根の上ではカーテンのロープをバスのアンテナの根元と窓枠に固定した。片手でロープ、片手で互いの腕や服をつかみ、流れに耐えた。



水が引いた後、国道に姿を現した観光バス。カーテンでつくったロープが見える。(昨年10月21日午後、舞鶴市志高)

寒さに耐えバスで一夜

「バスが流れないか」。プを取りに濁流に飛び込んだ午後十時半ころ、乗客の一人が、流れがきつくと、近くの街路樹に泳ぎ着いた。

流れてきた竹を乗客と持ち、バスが流されるのを食い止めた。午前一時ころ、もう一人が木に渡り、靴ひもで竹を木に固定した。

深夜、寒さと眠気が襲つ、「歌いましょう」。元看護師らが提案した。「上を向いて歩こう」「むすんでひらいて」。手を動かし、肩をたたき、深呼吸をした。高齢者や女性をみんなで囲み、風雨から守った。

「恐怖より、体が寒さに持ちこたえるかが心配でした」と豊岡市山王町の多田宗一さん(67)は振り返る。水の冷たさで足が硬直し、震えがきた。「多田さん、こんなに手が冷たくなつて」。近くの女性が手をマッサージしてくれた。多田さんはその手の温かさを今でも覚えてる。(京丹後支局 三村智哉)

▷33◁

京都新聞 2005年2月1日(火)掲載

国道水没

⑥

観光バスの乗客が屋根で救助を待っていた十月二十日夜、舞鶴市加佐地区の国道175号では、バスの前後で四十台以上の車が水没していた。

「ゴー」。迫り来る濁流の音を聞きながら市西消防署員の飯島憲生さん(35)は、救助した男性と二人、消防車の屋根で耐えた。お年寄りを避難させるため加佐地区の山間部へ出発したが、現地にたどりつけず、やむなく国道を市加佐分室に向かう途中でエンジンがストップしたのだ。

高さ約二・八層の消防車の屋根に立っていても、あこの下まで水が迫った。二

人は消防車にあったポリタンクを浮輪代わりにロープで体に巻き付け、流れに飛び込んだ。近くの街路樹にしがみつき、「寝たらあかんで」と励まし合い、夜明けを待った。

由良川沿いの桑飼上に住む男性(40)は、同日夕、東舞鶴の会社を出発。午後六時すぎ西市街地の手前で水没した観光バスを追い越した。しかし国道175号に入ると道路は所々で冠水し、渋滞。午後七時四十分、ようやく加佐地区との境の念仏峠を越え、妻(40)にあ



台風の翌朝、水没した車に逃げ遅れた人がいないか調べる海上自衛隊員(昨年10月21日午前9時、舞鶴市の大川橋上流)

と十分ほどや」と携帯で電話した。この時は「まさか」という。しかし大川橋を渡ると状況は

況は一変した。志高に入ると急に水位が上昇。泥水がボンネットに押し寄せ、車がかたかたと言い始めた。ハンドルも効かず、車体が浮いた。車を止め、暗闇の中を胸までつかりながら、流れに逆らって歩き、なんとか約一・三キロ離れた市加佐分室に避難した。「地理の分かる地元者でなかったら、どうなっていたか」。当時を振り返り「誰でも、多少のことやったら家に帰りたいという心理がある。なぜ、もっと早く通行止めできなかったのか」と訴える。

あこの下まで迫る泥水

(舞鶴支局 相見昌範)

台風23号禍

被災地の記録

▷36◁

台風当日の昨年十月二十日。風雨が強まるにつれ、舞鶴西署内は慌ただしさを増した。非番や休みの署員も招集、総力態勢で臨んだが、がけ崩れや道路冠水など、次々と飛び込む一〇番通報への対応に追われ続けた。

さらに午後九時すぎ「国道175号で観光バスなどが立ち往生」との知らせ。南口太副署長ら六人が署のマイクロバスで現場へ向かった。大川橋はすでに通れない。舞鶴若狭自動車道を緊急使用し、舞鶴大江インターで降りたが、車で行けたのはそこまで。暴風の中、冠水で寸断された府道や国

警察 懸命の活動

道を、ボートや徒歩で苦心しながら進んだ。

二十一日夜明け前、署員は応援の府警機動隊員と岡田郵便局先約一キロから手こぎボートで接近を図った。

「ゴウゴウ」と流れる川の本流に近づけば一気に流されてしまふ。注意深く山沿いを進み「バスがうつすら見えた」ころ、冠水で運べなかつたボートのエンジンがやっと現場近くに届いた。

「四人救助」と最初の連絡は午前七時ころ。手こぎボートもエンジンを装着、



流木などが地面を覆うなか、行方不明者の捜索を続ける府警機動隊員ら（昨年10月24日、舞鶴市蒲江）

自然の猛威に苦闘続く

二台のボートで水没したバスや他の車から計十八人を救出した。ホットする間もなく、署

員らは山崩れで民家が押しつぶされた山間部の滝ヶ宇呂に転進。がれきの下から二台のボートで水没したバスや他の車から計十八人を救出した。ホットする間もなく、署

現場で指揮した南口副署長は「到着した時に、もしバスが流されていたら...との不安が救助開始まで常にあった。滝ヶ宇呂では、駆けつけた息子さんにかける言葉がなかった」という。各地で地元警察や機動隊が懸命の救助活動を行った。しかしパトカーが水没して動けなくなるなど、激しい風雨に阻まれる場面もあり、京丹後市久美浜町では佐濃駐在所の比留木彰巡查部長(三〇)二階級特進で警部Ⅱが激流にのまれ殉職した。

▷37◁

京都新聞 2005年2月8日(火)掲載

写真・資料協力

- 《50音順》
- 綾部警察署
- 綾部市
- 大江町
- 大江町社会福祉協議会
- 大江町商工会
- 海上自衛隊舞鶴地方総監部
- 京都新聞社
- 国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所
- 第八管区海上保安本部
- 福知山警察署
- 福知山市
- 舞鶴海洋気象台
- 舞鶴市
- 舞鶴市社会福祉協議会
- 舞鶴西警察署
- 舞鶴東警察署
- 三和町
- 夜久野町
- 陸上自衛隊福知山駐屯地

自衛隊の災害出動

「自衛隊でない」と対応できない。最も強力な手段を早急にとる必要がある(馬場俊一・市企画管理部長)との判断だった。

海自隊舞鶴地方総監部は水中処分隊員ら約二十人を現場近くの大川橋に派遣した。船外機付きボートで二度、現場に向かうとしたが、増水した由良川の流れは速く断念。舞鶴航空基地

暗闇のため待機せざるを得なかった。夜が明け、川と空から救助が始まった。最初に現場で「通常より高い高度で空



海自隊ヘリに救助され、舞鶴航空基地に着いた被災者ら（昨年10月21日午前7時44分、舞鶴市長浜）

に着いたヘリの木内誠二機長(三三)は「バスの屋根にこの経験をかまえ、今後あらゆる状況に対応できるようにしたい」としている。

防衛以外にも多様な役割が期待されるようになった自衛隊。舞鶴地方総監部は「市や地元警察などと協力、

救出へ自治体と連携

救出へ自治体と連携

舞鶴支局 梶井進

京都新聞 2005年2月9日(水)掲載



発行日／平成17年3月

発行・企画／京都府中丹広域振興局

〒625-0036

京都府舞鶴市字浜2020番地

tel. 0773-62-2500

fax. 0773-63-8495

